

章炳麟とその周辺の「文学」概念

——漢字圏の言文一致運動と清末という二つの文脈—— 林 少陽



一 世紀の転換期における

中国知識人の言語、「文学」の討論

——劉師培と章炳麟

日清戦争後、とりわけ戊戌変法前後から新文化運動初期までの約二十年間において、言語文字の問題は中国士人の熱いトピックであった。これは中国學術史全体のとらえなおしと関係しており、このことは、中国學術史に対する再認識及び「文」または「文学」の再定義、「文学」とする範囲に対する討論をもたらすことになった。これは西洋の學術、文化の衝撃とも、近代化を早め実現させた同じ漢字圏の日本の衝撃とも、関係している。これらの衝撃は政治

的、軍事的、経済的、科学技術的な衝撃であると同時に、文化的な衝撃でもあった。李鴻章（一八二三—一九〇一）が同治一三年（一八七四）一月に発した感嘆を借用するならば、「実に数千年來未曾有の変局である」。

世紀の転換期において、中国士人は文学の定義・範囲の問題について頻繁に論じており、とりわけ一九〇五年に創刊された『国粹学報』において、學術史、学科等の枠組みの中で「文学」の定義・範囲を論じることは、最も関心の高い問題の一つであった。例えば、劉師培（一八八四—一九一九、申叔）は一九〇三年に「中国文字流弊論」という論文を書いた（『国文典問答』附録）。若き劉師培は一九〇五年にも『国粹学報』第一期において「文章源始」という論文を掲載しており、同時に「論文雜記」という論文も連

載しはじめており、『国粹学報』第一期至第八期、第十期)、さらに「文説」という論文も精力的に連載しはじめている(『国粹学報』第十一至十二期)。これらの論文はみな言語、文学の定義・範囲を討論するものである。清末において章炳麟(一八六九—一九三六、太炎)とともに、劉師培は言語、文字、「文学」についての最も頻繁な討論者の一人であり、「文学」を含む学術史を総括し、とらえなおしをした最も重要な学者の一人である。劉師培とほぼ同時に連載された論文には、例えば一九〇五年『国粹学報』第二期から第五期まで四期に分けて連載された田北湖(一八七七?—一九一八?)の「論文章源流」という論文などもある。

一方、ほぼ同時期に章炳麟も『きやうしん煊書』初刻本において、「訂文第二十五」の附録として「正名略例」という短い文章を掲載している(『煊書』初刻本は一九〇〇年に出版された^③)。その後、この文章は長文「文学説例」に拡張され、横浜を編集所在地とする『新民叢報』第五号(一九〇二年四月八日)、第九号(六月六日)、第十五号(九月二日)に三回に分けて連載された。この論文は章炳麟が初めて比較的系統的な形で「文学」の定義・範囲について討論した論文である。章炳麟は、一九〇三年に光緒帝を批判し革命を呼びかけた鄒容の「革命軍」に序文を寄せて逮捕された『蘇報』事件で、三年間入獄した。釈放後に孫文に

よって革命の海外本部である東京に迎えられた直後、一九〇二年論文の修正版・発展版として、一九〇六年に「文学論略」という論文を連載した(『国粹学報』第二十一期、第二十二期、第二十三期、一九〇六年八月二〇日〜一〇月二〇日)。さらに、一九一〇年にこの「文学論略」は「文学総略」という新たな題に直されて『国故論衡』に収録された(東京で初版、一九一二年大共和日報館再版)。

この一九〇六年の章炳麟の論文が劉師培と対話、ないしは論争的な性質を有していたことは、研究者の指摘している通りである。ある意味、「文学」の定義・範囲を主題とするこの論文は、その後も十数年間章炳麟によって書き続けられ、最後に「文学総略」という題で『国故論衡』に収録される形で完成した。一九三六年に死去するまで、「文学」とは何か、「文」とは何か、という問題は一貫して章炳麟が頻繁に論じていた問題である。

二 漢字圏の明治日本の 言文一致運動にとって「文学」とは何か

西洋との出会いによって引き起こされた日本の言文一致運動は、同時に翻訳概念としての「文学」を導入する結果に繋がった。一般的には、「文学」概念についての議論の前に言語、文字をめぐる議論が先にくるのが普通であるように

思われる。しかし日本において言文一致運動と国語運動は多くの場合、二つの運動として見なされ議論されてきたようである。この数十年來、日本の学界ではナショナルリズムを批判するために「国語運動」に対して批判的な眼差しを向ける傾向が強くなるのに対して、言文一致運動はどちらかというとき肯定的に議論されるのが一般的であるという印象が強い。この落差が事実とするならば興味深い。たしかに言文一致運動は、文学者、知的エリート等の民間人によって主導され、個人的なレベルにおける文体の探求と文学の実験であり、国語政策とは確かに違っている。また国語の問題は個人的なレベルの議論も存在しているが、主には政府主導の近代化言語政策と言語ナショナルリズムのイデオロギーが直結していた。しかし、他方、両者は重なっている部分も少なくない。実際綺麗に両者を分離することができないのも事実である。中国語の言語の近代化を意味する「五・四白話文運動」「国語運動」などの用語が曖昧に分けずに使われているのと同様に、本論も曖昧な形で両者を分けずに使うことにする。漢字圏に同じく属する以上、このような類比が妥当であり、また必要であろう。両者が對比される最大の理由は、中国を含む漢字圏のすべての国語運動にとって最大の公敵は漢文にこそあるという点であろう。

明治日本における言文一致・国語施策の討論は、文字表

記のレベルから始められたものであり、慶応二年（一八六七）二月に、武士、のちに明治政府の官僚になった前島密が幕府の將軍徳川慶喜に奉ったという「漢字御廃止之論」はよく知られている。漢字廃除論などを経て近代的な「文学」概念に至るまで短くない時間がかかった。明治一五年（一八八二）には、当時、速記法の研究で知られている田鎖綱紀らの演説の速記の本が流行し、これも後の言文一致運動を推進させた。文学においては、文学者である二葉亭四迷の小説『浮雲』（一八八七年）や山田美妙の小説『夏木立』（一八八八年）が出版され、新しい「言文一致」の文体が文壇に影響を与え、近代日本における言文一致文学の嚆矢とされたが、これは文学史を書いた者の事後の追認でもある。一九〇四年に小学校で第一期の国定教科書『尋常小学校読本』が採用されたことをもって、制度的に言文一致・国語政策が全面的に確立したと言える^⑥。この年こそ言文一致世代の始まりであるというのが妥当であろう。

これと連動するかのように、文学の定義・範囲などの問題は同じ漢字圏に属している日本においても熱い話題となった。明治維新が始まると、「文学」の問題は注目された。例えば、明治日本政府の太政官を務めていた、熊本の武士で儒学者である木下真弘（一八二四―一八九七）は、その『維新旧幕比較論』においてこれに触れている。本書は、木下が明治九年（一八七六）末から明治一〇年（一八

七七)の後半にわたって、明治維新以降の様々な改革と、その前の幕府の旧況との比較を記録したものであり、明治初年を研究するための貴重な資料である。木下は明治三年の学制について、その「弊」として挙げているものに「官立は程朱の学に限る」と指摘しながら、「その利便に属す者を掲ぐ」に、「大中小学規則を定む。旧政中、文学のこと頗ぶる勸奨すといえども、今の学制の便なるに如かず」と述べている。この時の「文学」は官立学校において依然として朱子学を指しており、他の学校は異なるということからみれば、この時代の「文学」はまだ翻訳概念の「文学」ではなく、広義的なものである。

のちの夏目漱石(二八六七—一九一六)の時代になると、この状況はすでに変化している。漱石の名著『文学論』はまさに「文学」の定義・範囲で悩んだ結果として生まれた産物である。本書は一九〇一年九月から書き始められたが、一九〇九年に未完のまま出版された。漱石はその「序」において「余は少時好んで漢籍を学びたり」、「文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり」、「ひそかに思ふに英文学も亦かくの如きなるものべし」と回顧している。そして「卒業せる余の脳裏には何となく英文学に欺かれたるが如き不安の念あり」、「漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざる可からず」と述べている。

確実に言えることは、文学の概念、定義などをめぐる思考者としての夏目漱石は、小説家の夏目漱石より先にあつた。様々な証拠でもって示されている通り、前者としての漱石、少なくとも大学時代の漱石が将来になりたい「文学」者とは、唐の韓愈、柳宗元のような唐宋古文家を意味していた。二三歳の時に書かれた処女作『木屑録』(明治二二年八月)は、韓愈、柳宗元、蘇軾を模範とする漢文学作品であり、その文風の勢いは非凡なものであり、一代の文豪の姿がすでに表れている。のちの漱石は多様なスタイルの小説家として知られるようになるが、人生の後半へと入りかけた修善寺にて大病後に人生を慰めた「文」とは、小説や和歌ではなく、また漢文の文章でもなく、むしろ漢詩、山水画、部分的には俳句であつた。ちなみに中村光夫が指摘した通り、明治初年の日本文学の出版物は依然として漢文出版物が主流である。

研究者によって指摘されている通り、近代的な「文学」の成立は明治日本文学史の叙述と、ナシヨナリズムと深い関係にある。清末の中国に関して言えば、戊戌変法前後と二〇世紀最初の数年間において、ヨーロッパと日本の言文一致運動(特に後者)の影響を受けて、文字改革のレベルにおける議論がまず始まり、さらに書記体全体に対する自己反省的な議論へと広がっていった。これは基本的に日本の状況と共通しているが、日本とは十数年間から二十年間

の時間差がある。

三 『新民叢報』における 章炳麟の「文学」定義・範囲

ここでは先の議論を背景にしながら、章炳麟が一九〇二年に『新民叢報』に書いた「文学説例」という論文と、劉師培が一九〇六年に『国粹学報』に書いた「文学論略」という論文とを比較し、同時に同一時期における章炳麟と劉師培の議論の間に、どのような断絶があるか、また関連があるかを見てみたい。

まず強調しておきたいのは、『新民叢報』の文章の原題は「文学説例」であったが、それが書き直され、一九〇四年の『廬書』重刻本に収録された際にはその表題が「正名雑義」とされ、この論文はさらに書き直され、一九一〇年に『国故論衡』に収録された際にそのタイトルはまた「文学総略」と直された。

ここで一九〇二年の「文学説例」の趣旨を見てみたい。「文学説例」の書き出しにおいて章炳麟は「文学」を次のように定義した。

「緒」において曰く、「爾雅以て古を觀れば、以て小く辨わきまえることを取らない」。これを文学と謂う。文学の始

は、けだし言語において発生される。(しかし)文字が作られると、言語と文字の両者は互いに交渉し結合することがあつても、流れが殊ことなるものである。

(原文：緒曰：爾雅以觀於古、無取小辯、謂之文学。

文学之始、蓋権興于言語。自書契既作、通有接構、則二者殊流。)

右の引用を見ると、言語と「書契」(文字)が「殊ことなる流れ」であることを強調したことが、章炳麟の趣旨の一つであったことが窺える。同時に、「文学説例」の書き出しの結末部において、章炳麟は「小学(漢字学)には精通しているが、文辞が下手である者もいる。しかし、小学を知らずに文を言える者はいない。今これを例証するために文学と漢字学が相関っている概ねの例を取りたい」(「有精於小学拙于文辞者矣、未有不知小学而可言文者也。今為説例、率取文学與雅故神旨相關者」と述べた。小学を以て文学の興衰を討論することが、本文のもう一つの趣旨であることが明らかである。

他方、研究者の陸胤が、二〇一七年に中国で競売された章炳麟の手書きの原稿と雑誌論文を比べ、このような定義は手稿にはないことを発見した。実際『廬書』重刻本に収録された論文にもこの段落はない。ここではひとまず、『新民叢刊』を中心に議論を進めたい。

「緒」において曰く、「爾雅以て古を觀れば、以て小く辨えることを取らない」。これを文学と謂う」という章の定義を見てみよう。「緒」とは、晋の郭璞が注を、宋の邢昺が疏を付けた『爾雅註疏』における、「爾雅序」の邢昺の疏（二次的な再解釈）からの言葉である。『爾雅』は春秋戦国時代の諸経書の伝注を集めた訓詁学の本である。その「序」に次のようにいう。「爾とは、近いことなり。雅とは、正のことなり。近づいて正を取るべきことなり。（中略）孔子は曰く、「爾雅以て古を觀れば、以て言を辨ずるに足りる」（原文…「爾、近也；雅、正也；言可近而取正也。（中略）孔子曰…爾雅以觀於古、足以辯言矣」）。『爾雅以觀於古』とは『論語』に見られず、『大戴礼記・小辨』において登場する。その内容は次のようである。魯の哀公が孔子に「自分は「小辨」を学ぼうとすることで政治を見ようとしたいかどうか」（原文…寡人欲学小辨、以觀於政、其可乎？）と聞いたが、孔子は違うと答えた。孔子曰く「辨にして小ならざれば、小辨は言を破り、小言は義を破り、小義は道を破る。道が小なるときは通ぜず。通ずる道は必ず簡なり。是の故に弦に循ひて以て樂を觀ば、以て風を辨ずるに足る。爾雅以て古を觀れば、以て言を辨ずるに足る」（簡は大と解す。原文…辨而不小。夫小辨破言、小言破義、小義破道、道小不通、通道必簡。是故循弦以觀於樂、足以辨風矣；爾雅以觀於古、足以辨

言矣）。孔子の趣旨は『爾雅』と関係はなく、政治、倫理のレベルの「義」、「道」についてのものであり、そのために「正（雅）に近い」ことが要求される。

章炳麟のここでの引用は『爾雅』について論じているわけではないが、小学（漢字学）の角度から文学を論じたものである。章炳麟が『爾雅』序に対する邢昺の註を借りて説明しようとしたのは、文学が「雅に爾」／「正に近い」ことである。では、何が「雅」または「正」なのか。章によれば、「文」を為すためには、「表象の病」が氾濫する前の字の意味に近付けなければならない。私なりに言い換えれば、「文」を為すとは決して言語的な「小」、すなわち一般的な言語表現の技巧、ないしは華にして実にあらざるといった言葉の綾ばかりを求めようとすることではない、という意味になる。これが「無取小辯」の意味であると理解できよう。この点についてさらにあとで説明を試みたい。

「表象の病」とは、章炳麟が東京大学で比較宗教学講座を開設した姉崎正治の言い方であり、姉崎の考えはマクスミュラー（Friedrich Max Müller, 1823-1900）から示唆されたものである。姉崎は次のように述べている。

マクスミュラーは神話を以て言語の疾病腫物となしぬ然ども神話が言語の疾病なるが如き觀あるは語言其物の特

質にして、言語は決して其物と吻合し得る者にあらず、必や之を表象せざるべからず。雨降るといへば、其中には幾分が雨を人格的に表象するの跡あるを免れず、「風が吹く」「水が流る」も皆然り。且此より進みて抽象思想の言語に至れば、此の特徴は一層顕著にして、「大なる思想」「長き思索」「度量の引き」といふが如きは、精神現象を有形的に表象したる者なり。(中略) 兎に角人間の思想は総て此の如き表象主義を離るを得ず、表象主義ある以上は病的素質あるなり。¹⁸⁾

章炳麟の姉崎／マクスミュラーからの影響については、小林武にすでに指摘されている通りであるが、ここで贅言するつもりはない。右の引用は私なりの理解で言い換える、言語表象は比喩性を頼りにしているが、比喩性によって拡張されると同時に、それ自体が一つの病となる。章がこの言葉で言いたかったのは、「文と質が離れていれればいほど表象が多くなり、その病も益々甚だしい」ということでもある。²⁰⁾ すなわちここで章炳麟は文学が華々しい気風であることを「字」「詞」のレベルにおいて批判し、「識字」を通してしか浮華な文風を一掃することができない、と見た。これを通して章は「淳質」「質簡」の文を求めようとしている(「淳質」「質簡」は「文学説例」「新民叢報」第五号における言い方である)。

四 「爾雅」に基づく章炳麟の「文学」観

「爾雅」に基づく文学観は、章炳麟の「文学説例」における文学史観にも見られる。章は次のように言っている。

漢の司馬相如、揚雄、班固などは、みな嘗て『凡將篇』『訓纂篇』『倉頡篇』を書き、または編纂したので、その文辞は閎雅¹⁹⁾である。それは言葉を選ぶことを知っているからである。唐の時代において文采を樂しむ者は、なお精密でないが字を一応識ると言われている。(中略) 兩宋以降、斯る道は漸くごく普通になったが、しかし自分の文章をなお「古文辞」と号していた。

(原文：漢世相如、雄、固之属、皆嘗纂凡將、訓纂、倉頡、故其文辞閎雅。知言之選。唐時樂文采者、猶云略識字。(中略) 兩宋以降、斯道漸普、然有所述作、猶号曰古文辞。)²¹⁾

引用文中の、秦の李斯(？)前二二〇)などの『倉頡篇』、漢の司馬相如(前一七九-前一七)の『凡將篇』、揚雄(前五三-後一八)の『訓纂篇』などは、清の朱筠「重刻說文解字序」に列挙されている通り、漢の許慎の『說文解字』が依拠した一部の漢字学の著作である。章太炎が班固

に言及したのは、おそらく班固が書いた『漢書』「芸文志」に小学に關する貴重な記載があるためであろう（小学とは小学で字を識るといふ意味からのちの漢字学の名として使われるようになった）。『漢書』「芸文志」は蔵書目録に基づく學術史である。『漢書』「芸文志」の「小学」部分は先に列挙した漢代の小学校教科書（童蒙の識字教科書）を含む小学十家、四十五篇の記載がある。ここで章太炎が言いたいのは、司馬相如、揚雄、班固などの文豪がその文辭が弘雅であるのは、小学の知識のおかげである、ということである。すなわち文を為すに字を識らなければならず、それを通してしか「表象の病」を免れることができない。「閑くして雅やか」であるべきであり、「表象の病」に基づくような「美」であるべきではない。そうであるがゆえに、「疏通古文、後学之任」と章は強調した。

他方、章炳麟は、「有韻之文」は無理に音韻に合わせるために表現が自由にできなくなり、それで文字が増やされ、「余計な腫物」（疣贅）が実に多いと批判する（原文…或以数字成句度、不可増損、或取協音律、不能曲隨己意、強相支配。疣贅実多）。

章が「爾雅」に基づく文学を主張する以上、さらに「雅」と「古」の意味を見てみる必要がある。『詩経』「毛詩序」において「雅」について解釈していることも無視できない。「天下の事を言い、四方の風を形わす、これを雅と

謂う。雅とは、正なり。王政の廢れたり興えたりする所以を言う。政に大小有り、故に雅にも大雅と小雅が有る」と。孔穎達は次のように解釈している。「雅は正と訓する。天子によって政教を以て天下を齊しく正すことになる。（中略）道を得ればすなわちその美雅の正を述べる。（中略）もし天下を齊しく正すにその理を失えば、すなわちその悪を刺す。周幽王、周厲王、小雅などはそうである」。「雅」は「正」と解されるが英訳は Proper である。この英訳は現代の読者の理解に一助があろう。「風」は風習の意味であるが、ほかに二通りの「風」がある。例えば「上以風化下、下以風刺上」（上に居る者は下々を風化（感化・教化）し、下に居る者は上に居る者を風刺する）である（「毛詩序」）。風刺とは、すなわち下の上（権力）に対する批判である。

右の引用からもわかるように、「風」と「雅」は分けて論じることができない。したがって章太炎の「爾雅以觀於古」とは、なお文学と政治との關係を含有しており、同時に章炳麟の文と史が通じるということに対する思考も含められていると理解できる。詩経学で知られている清の馬瑞辰が『詩正義』が曰く、〈詁なる者は古なり。古と今は語が異なるので、これに通じれば、人に知らせることになる〉。（中略）今より古に通じることのみな詁訓と曰く。訓詁とも曰く」（原文…『詩正義』曰…「詁者、古也；古今異語、

通之使人知也⁽²⁰⁾」という。これは章炳麟の「爾雅以觀於古」にある種の解釈を与えていよう。すなわち章にとつて言語的レベルにおいて古に通じることと、歴史的なレベルにおいて古に通じることとは一つのことである。

総じて言えば、章炳麟の「爾雅以觀於古」とは、言語的な側面、文学と倫理との関係、文学と政治との関係に対する思考があり、さらにこれは章炳麟の復古的文学史観、文学史観に対する思考とも繋がっている。これらの側面を合わせて考えれば、「文学」が雅に爾^{もか}づき、正に近づくべきであるという観点は、中国の「文学」の批評の伝統において「文」と「質」が不可分な関係にあり、両者の間にある種の均衡な関係があるべきであるという観点に通じるところがある。しかし、その独自性は、具体的な例を挙げながら漢字学の視点から理論的に論じることにより、それを通して「文学」が漢字学の素養に基づくべきだという独自の見解へと展開させているというところにある。劉師培も文学が小学に基づくべきだという見解であるが、文がすなわち韻文という点において阮元の見解を踏襲しているので、章のそれと決定的に違うところがある。

さらに、陸胤論文の指摘によれば、競売手稿と『新民叢報』論文との間に、手稿にはなく『新民叢報』論文に加えられた最後の一段がある(原文は注を参照⁽³¹⁾)。実際この一段は『廬書』重刻本に収録された「正名雜義」にもあるの

で、この手稿は『新民叢報』論文と「正名雜義」の「正名雜義」初稿の可能性が高い。この一段とは次のような一句である。「爾雅とは正に近いことであることを知り、民がこれを以って財を共にすることを分る」と。⁽³²⁾これは『礼記』「祭法」にある次の言葉に由来している。「黄帝は百物^{ぶつ}を正し名づけて以て民に明にし財を共にする」(原文…黄帝正名百物、以明民共財)。孔穎達は「財を共にするものとは、山と草木の茂っている湿地が障碍物ではないので、民が百物を取って以て自からを養うことを教えることを謂う」(原文…共財者、謂山沢不藪、教民取百物以自贍也⁽³⁴⁾)と注釈している。「名を正す」とは「字を正す」とでもあるので、「爾雅」の意味、すなわち正に近いという意味に通じるものである。その解釈の根拠は、『論語』「子路」の「必也正名乎？」に対して、鄭玄が「名を正すとは、書字を正すことを謂う」とし、⁽³⁵⁾馬融は「百事の名を正す」と解釈した⁽³⁶⁾ことにある。

そもそも章炳麟の「文学説例」は『廬書』重刻本に収録された際に「正名雜義」とタイトルを変えられたが、「文学説例」の元となった論文のタイトルは「正名略例」であった。この事実からわかるように、この時期の章炳麟にとつて「名」を正すことと「文学」を正すことは、切つても切れない関係にあったとさえ言うことができる。

五 「進歩」と清末中国の文字と

語言に対する「原罪」

——章炳麟との対比にある

劉師培の言語文字観と「文学」観

この時期の劉師培には時々、文字と言語について進化論的色彩をもつ表現が見られる。この問題は二つのレベルにおいて見る必要がある。まず文字のレベルにおいて。これはおそらく識字率の向上、民智の啓蒙という劉師培の考えと関わっている。彼の観点はこの前提の下においてのみ、やや進化論的な考えを内包していると言える。次は文学、文体のレベルにおいてである。「文学」の問題に関しては、劉師培の観点はほとんど進化論的な考えとは無縁であり、場合によっては進化論的な考えと反するものである。これは彼における韻文中心の「文学」的な標準と関係がある。もちろん文字・言語のレベルと文学のレベルは、分けて論じることができないので、これが劉師培の議論が時に矛盾が生じてしまう原因の一つであると推測できる。

劉師培の観点を具体的に説明するために、まず劉師培の『国粹学報』での連載である「論文雜記」を例に見てみたい。彼は次のように述べている。「英儒のスペンサーが嘗て「世界が益々進化すれば、則ち文字も益々退化する」と

言ったことがある」。また、「六朝において文と筆が分かれており、宋代以下の文詞は益々浅くなる。そうして儒家の語録が以て興る。元代以来、復詞曲またが盛興する。言と文との合一すすが漸む。故に小説の体が是により興る」、「私見によれば、古今文字なるものは浅と深、文と質の違いがある。これは進化の公理ではなかるうか。故に文字の進化の公理で言えば、則ち中国が近代以来必ず俗語が文に入るといふレベルを経らなければならぬ。昔、欧州十六世紀の教育家であるダンテ氏が本国の言語を文学に用い、そうして国民の教育は興つた。蓋し文と言が合一すれば、則ち識字者が日益に多くなる」と述べている（「十六世紀」とは劉師培の誤りである）。ここからわかるように、この時期の討論はヨーロッパの影響下にあるものである。

実際、右のような劉師培の観点は彼が一九歳である一九〇三年の論文「中国文字流弊論」において見られる。「中国が習うところの文は典雅を主とし、世俗の語を浅陋として斥ける。これは中国の文字が弊に致る第一要因である。今この弊を革めるに二策がある。一に曰く俗語を用いるべし。（中略）二に曰く新しい字を造るべし。（中略）この二策を中国で行えば、文字も改良されるので教育普及の第一策となる」。「新字」とは外来語のことであるが、これについては章炳麟も提唱したが、言文一致に関しては章炳麟が一九〇二年の「文学説例」という論文で否定している。この論

文において、章炳麟は口語的な表現を良くない文体の原因として言及しており、彼が挙げた例は「戦国の口説」を模倣した文体である。彼によれば、この類の文体は往々にして文の彩を求めあまりに「浮言が要を妨げる」文体となってしまう（彼によれば、唐の杜牧がその典型である³⁹）。章炳麟の口語体に対する批判は、彼の「表象之病」を批判し、質樸、簡質の文体を求めようとすることと関係がある。

とはいえ、『新民叢報』に掲載されたこの論文において、章炳麟は「進歩」に対して明らかな疑問を提示している。とまではまだ言えない。例えば章が文中において「新造語は、言語が発達する端^{はしめ}であり、新陳代謝のための用である。今世紀は進歩発見の時代であるため、新しい事物があれば、誠に新造語でなければ足りないことは明らかである」と述べている⁴⁰。この一言で章炳麟が進歩に対して楽観的であるといえるかどうかは慎重に考察するべきであるが、進歩を疑問視していないことは明らかであろう。他方、章は、翻訳語としての「文学」を拒絶してはいるが、翻訳語としての「哲学」を始終熱心に使ってきた。

しかし、「進歩」に対しては、章炳麟は少なくとも一九〇六年以降は理論的な面において進歩主義、進化論に対する最大で最強な批判者となっている。例えば、章炳麟はその「俱分進化論」（『民報』第七号、一九〇六年九月五日）において、ヘーゲルを次のように批判した。「彼が執って

いるのは、終局目的であり、必ず美、醇、善を尽す境界に達してはじめて進化論が成功する、（という立場である）」と批判した（美、醇、善とは、真、善、美というプラトンの三つのイデアのことである⁴¹）。章が批判しているのは、ヘーゲルが哲学的に支持している「進歩」という理念である。章から見れば、それは歴史を始まりもあり終わりもある一直線的な全体として想像する上での目的論的歴史哲学に過ぎない、と看破した。むしろ物事は相反する二つの側面を同時に持っているものである。章は、「もし道徳を以って言えば、則ち善も進化し悪も進化する。もし生計で以って言えば、すなわち楽も進化し、苦も進化する。双方が並進するのは、影が形につき随い、魍魎（影の外側に見える薄い影）が（人の）影を追うのと同様である。それ以外にあるはずはない」と述べている（同前）。同時代の中国知識人の主流は進化論を信奉していたが、章炳麟は進化の両面を見ており、先覚的であると言える。

このほかに劉師培の「蓋し文と言が合一すれば、則ち識字者が日益に多くなる」は、清末以来の多くの中国士人の共通認識であった。この共通認識は「五四」以後益々主流となり、今日の中国知識人の主流的な観点となっている。しかし、章炳麟は例外であった。彼から見れば、識字率の問題は強制的な教育制度の有無の問題にすぎず、彼は「象形文字（漢字）か、表音文字かの問題ではない」と述べて

いる。⁴²この見解はアナキスト革命者の仲間である『新世紀』同人の言語文字観を批判する文脈で述べられた言葉である。パリで編輯されている『新世紀』同人の言語観は、例えば一九〇八年二月二九日『新世紀』第三六号において「醒」というペンネームの作者が「統万国新語之進歩」という文章において述べている。「欧米文明が発達して数十年に達しているが、それに対して中国が今に至ってもなお停滞しているのは、その原因を極めれば、実に文字が野蠻である故である。吾輩は今日に急起して直追しようとするには、中国の旧文字を廃して万国新語（エスペラント）を取らなければ功を為さない」と述べている。⁴³このような言語観は、のちに『新青年』時期の章太炎の弟子であった錢玄同（一八八七—一九三九）によって継承された。⁴⁴

再度、強調しておきたいのは、劉師培の進化論的な立場自体が不安定なものであり、むしろ反進化論的である方が普通であったときえ言えることである。例えば、右の引用と同じ文章において、劉は先秦諸子の文こそが「後世文章の祖」と述べ、「屈原の楚辞は憂が深く思いが遠い。それは上には風雅の遺を承り、下には詞章の体を啓く。これも中国の文章の祖である」、また「周末諸子は文詞の美を以て後世の保持を得て流伝して失なうことはない」と述べている。⁴⁵総じて言えば、彼は西洋の「文学」概念に対して拒絶的である。その事例として、例えば、一九一七年に

劉師培が北京大学の教材として使っていた『中国中古文学史』は新文学への批判の意思を込めて、中古（漢末、魏、晋、宋、齊、梁、陳）の文学を講じる文学史論著である。

劉師培の文学の考えを総括的に纏めた『中国中古文学史』の趣旨について、彼が「概論」第一節で、「この一節は儷文律詩こそ諸夏（中国）独有のものであることを明らかにする。今、外域文学と競り長けるために、唯だ斯る体を資する（頼りにする）」と明言している通り、西洋由来の新しい「文学」概念との対抗意識が一目了然である。「概論」の第二節の趣旨については、「文の訓詁を申べ明し、偶詞（対偶）と儷語（駢儷文）でなければ、文と云うに足らぬことを、学者に、その名を顧みさせ、その義を思わせるようにしたい」と述べている。これはのちに章炳麟の「文学」概念をめぐる論争を引き起こすことになった文学の基準でもあるが、後述したい。

『中国中古文学史』の第三節は「齊、梁の文詞が律を以て進むことを証明し、程律を引いていない後世の作を援引すること、上の齊、梁を薄するようにはしない（程律…格律）、本書の第四節は「沈思翰藻、文が律に背かないのを証明し、焜有光、茅坤、方苞、姚鼐などのような詩文を華にして実らぬという理由で嘗っているのはいけない」（翰藻…詩文。南朝の梁の蕭統の『文選』「序」における「事は沈思より出で、義は翰藻に帰す」からの言葉）と述べて

いる。これは清における駢文と散文についての論争で論じられた散文側（桐城派文学とこれらの文学者が影響を受けている明の文学者である帰有光、茅坤）の文学を指して言った言葉である。すなわち駢體などのような韻文のみを「文」とする考え方であり、桐城派のように唐の韓愈を模範とする散文は「文」ではないという劉師培の考え方を示している。この観点は章炳麟と真向から対立している。しかし、劉師培は本書の第五節で「六朝の前の文を必ず研読すべきことを明かす」と述べている。「六朝の前の文」とは、実質的には周、秦、漢の文を模範とし、源流とする考えである。劉師培のヨーロッパからの「文学」概念に対する態度はここからも垣間見える。また、同時にここから彼の文学観は直線的な進歩主義と対立していることも窺える。

六 清末の「文学」討論と明治日本

——「東文体」の悩み

章太炎論文と明治日本との関連を説明するに一番説得力があるのは、その論文を発表する場であった『新民叢報』の編集部が横浜に置かれているという事実であろう。そして陸胤も指摘した通り、章太炎の『新民叢報』論文が言及した日本語著作は四種もあり、日本語に翻訳された欧文書は三種であったが、章太炎の外国の書籍に対する理解は、

彼が一時期広智書局で「訳稿を刪潤」⁴⁸していたことに関係がある。

他方、もう一つの『国粹学報』も、その名前は西洋学術に対する意識を表しているが、同時に言語的近代を含む明治日本の学術（いわゆる東学）に対する意識も明らかに示されている。例えば『国粹学報』の創立者の一人である黄節がその『国粹学報叙』（『国粹学報』乙巳第一号、光緒三十一年（一九〇五）正月二十日社説）において次のように述べている。

日清戦争の失敗で（中国の士人が）日本に驚かされた。それに（日本と中国は）文が同じく地理的にも近く感情も合い、その効果も早い。日本は遂に泰西の席を奪って吾が師となる。そうすると日本に憧れるようになる。嗚呼！吾が学を亡ぼす者は泰西には在らず、日本にあり！なぜなら、日本と吾は同文にして混合しやすいからである。生物に譬えていえば、異種なる者は複雑さが有れども競争するのを妨げない（原文・異種者雖有複雑、無害競争）。しかし同種にして異類である者は競争が有れども、往往にして同化されやすい。泰西と吾は異種なる者であり、日本と吾は同種にして異類なる者である。⁴⁹

ここで言っていることは特に新しい文体としての「東文体」のことを指している。「東文体」によって引き起こさ

れた悩みは、この新しい文体と漢語文言文とが似て非なる同異であることであつた。いわゆる「東文体」とは清末民初において多少揶揄的言ひ方ではあるが、明治期の学術書物や新聞などにおける主流の文体であり、和文法と漢文法とを折衷しながら新造語を多用する文体とでも定義できよう。「東文体」は戊戌変法前後の中国士人に強い影響を与えている（梁啓超がその代表である）。

古樸な文体を貴ぶ者にとつて、東文体は厄介な存在であつた。この悩みはむしろ同文の悩みであり、率直に言えば、悩みはその魅力と新鮮さにこそ由来するものである。平田昌司によれば、南宋の呂祖謙（一一三七—一一八一）の『東萊博議』や、謝枋得（一二二六—一二八九）の『文章規範』、清の儒者唐彪（一六四〇—一七一三）の『讀書文譜』などの科挙のための啓蒙書は明治日本において漢文愛好者に歓迎された（彼はこれらの愛好者を「文化遺民」と呼んだ）。また、これらの書籍は明治日本の新聞の論説文体に影響を与えた。従つて平田は東文体を「科挙言語」と西洋学術文体との結合によって生まれた「畸変形態」である、と見ている⁵⁰。中国士人にとつて、清末の桐城派とこれらの科挙言語との関係が如何なるものであつたのか、そして中国の科挙言語が混ざつた東文体との関係が如何なるものかは、複雑で興味深い問題である。ここでは深入りできないが今後の課題としたい。他方、陶徳民は、桐

城派の文章論がどのように明治・大正の日本の漢学者、例えば、藤野海南、安野重繹、西村碩園などに影響を与えたのかを論じている⁵¹。これらの事実を総合して考えると、清朝中期と末期における駢文と散文（桐城派）の争いは、清末の『国粹学報』によつて代表される東文体に対する嫌悪との間に、実際ある種の関連を有しているものである。さらに言えば、これは漢文共同体が西洋と出会うことによつて引き起こされた問題である。

この悩みはこの意味において同文の悩みでもある。これについて『国粹学報』創刊号にある「略例」において、「本報の撰述は、其文体は純粹に国文の文体を使い、淵懿^{えんい}精実を求め、近日の東瀛文体における粗浅の悪習を務めて一洗しようとする」と述べている（乙巳第一号、光緒三十一年）⁵²。『国粹学報』同人の「東文体」に対する嫌悪は一目瞭然である。これは却つて東文体の巨大な影響力を裏返しに物語っていると見えよう。これも清末における「文学」論の文脈として念頭に入れるべきであらう。

七 『国粹学報』時期における章炳麟の

「文学」定義・範囲についての变化

——王国維との対比において

章炳麟が『新民叢報』の論文において、「緒」において

曰く、「雅に爾つく、以て古において観る。小く辨えることを取らない」。これを文学と謂う」と定義していたことについては前述した（爾雅以觀於古、無取小辯、謂之文学）。しかし、一九〇六年八月に『国粹学報』で三期に分けて連載された「文学論略」においては、この定義が次のように一変している。「何を以てこれを文学と謂うのか。文字が竹や、帛に著されるのを以て故にこれを文と謂う。其の法式を論じる、これを文学と謂う」と述べている。「竹」や「帛」（竹簡や絹布）に著すもの、すなわち紙に書かれた文字を「文」と称し、その「法式」を論ずることを「文学」である、と定義している。また、章は「文」を「句読のない文」（句のある書、表、譜、「簿録」〈物事の記録、典籍の目録〉、「算草」〈ノートや紙に書きだしたもの〉）と、「句読のある文」（韻のある文と、韻のない文）とに分けられると主張し、このような定義でもって「前の昭明（梁の昭明太子蕭統）、後の阮元の持論は辨ずるに足らず。最後の一説について学説と文辞が対立するようになり、その規模はやや博いと雖も、その失は惟だ彰彰を以て文とし、文字を以て文としない。故に学説のような彪でない者は悍然と文辞の外に斥ける」と述べている。

『国故論衡』（一九一〇年）に収録された「文学総略」において、章炳麟は「文」と「彪」、「章」と「彰」について次のように定義している。

夫れ其の形質を命けては文と曰い、其の華美を状しては彪と曰ふ。其の起止を指せば章と曰い、其の素絢を道べれば彰と曰ふ。凡そ彪なるものは必ず皆文を成すが、凡そ文を成すもの皆彪を成すにあらず。これが故に文学を推り論じるは、文字を以て準とし、彪彰を以て準とせず。

この討論は韻文のみを「文」とする阮元、劉師培を批判する文脈にある。『新民叢報』論文（一九〇二年）における章の「文学」定義と比べて、『国粹学報』論文（一九〇六年）（または『国故論衡』論文、一九一〇年）の変化の特徴は、まずその「文学」定義は小学に基づきながらも「字」「詞」のレベルを超えていることにあり、そうであるがゆえに簡潔でありながらも、拡張しても考えることができ、表や、譜、典籍の目録、視覚的圖像なども包括していた、という点である。

ただ、興味深いことは、章炳麟は『新民叢報』論文において明治期の小説家、翻訳家である洪江保（一八五七—一九三〇）の『希臘羅馬文学史』（東京・博文館、一八九一年）における「文学」の範囲に言及した点である。章によれば、洪江の本にある、ギリシアの「文学」の範囲について、「世は希臘文学が自然であり発達していることと謂っているが、その秩序を觀れば、一年の氣候と似ている。梅花が先に発し、次に桜花に及び、桃の実が先に熟して、次

に柿の実に及ぶ。故に韻文が完全に具え、そうして後に散文がある。史詩はその功が善く、そうして後に戯曲がある。(洪江保『希臘羅馬文学史』を見よ。)韻文が史詩より先立ち、次に樂府、後に戯曲である。散文が歴史、哲学より先立ち、後に演説がある」と述べている。⁽⁵⁶⁾すなわち、章炳麟が文学の範圍を極端なほど広くひろげたにもかかわらず、戯曲をその外に排除しまったということが、対比してみるとわかる。

一方、ほぼ章炳麟の『国粹学報』論文と同じ年に発表された王国維(一八七七一—一九二七)の「文学小言」における文学観は、章炳麟のそれと最も対照的である(『教育世界』総一三九号、一九〇六年)。王国維は、「食べるための文学は絶対文学ではない」(「舗餼的文学、絶非文学」と述べ、「文学なる者、遊戯の事業なり」、「文学の中に二つの原質があり。曰く景、曰く情、である」と述べている。そして「吾人が謂う戯曲小説家とは専門の詩人であり、文学を以て職業とする者を謂っているわけではない。文学を以て職業とするは、食うための文学である。職業の文学者は、文学を生活とするものであり、専門の文学家は文学のために生活するものである」⁽⁵⁷⁾。戯曲が「文学」の重要な内容である点について、例えば、王国維はその『宋元戯曲考』において「元の曲」が「二代の文学」と明言している。⁽⁵⁸⁾王国維のこの時の「文学」概念及び「文学」観は、明らか

に明治日本を介してのヨーロッパの影響が見られる。戯曲を「文学」の一部として取り入れたことがその一である。「文学小言」において「純文学」と「舗餼的文学」(食べるための文学)とを対立させたのはその二である。「純」文学」という観念は近代ヨーロッパ的な観念であるが、それは美を極端に高揚する点においてドイツ浪漫派の影響であろうと推測される。これは彼の京都大学での経験と無関係ではなからう。

章炳麟が戯曲を「文学」に入れていないことは、一つの欠陥であり遺憾であると言わざるを得ない。明清中国の社会において、ある程度総合的な芸術的文学的ジャンルとしての戯曲ほど郷里の自治社会において大きな影響を与えているジャンルはないかもしれないからである。これも彼の「爾雅」または文学が小学に基づくべきであるという考えと関係があるかどうかは断言できないが、関わりがある可能性がある。

八 章炳麟の「文学」とその中国學術史的関心 及び「文学復古」との関連

章炳麟の『国粹学報』での連載である「文学論略」の意図について、劉師培が「韻があるのみを文とする」という阮元の立論を踏襲したことを論駁するために書かれたとい

う先行研究がある。⁸⁹⁾ たしかに章炳麟の『国粹学报』の論文の観点は、劉師培と真向から対立するものである。劉師培はその「文章源始」において清の儒者阮元の主張する「文」と「筆」の区分を再び清末の文脈において提起し、「有韻者文、無韻者筆」と主張した。これは昭明太子の『文選』派によって代表される「沈思翰藻を以て文とする」という主張に遡れるが、劉師培はより進めて「是は則ち文なる者は経、史、諸子の外に別に一体を為す者也」とまで定義した。⁹⁰⁾ このような主張は、劉師培の「論文雜記」及びその後の『中国中古文学史』（一九一七年）においてより系統的に展開された。

阮元は蕭統の見に基づき、「必ず沈思翰藻、是を文と名付ける」と述べ、「昭明が選ぶところ、これを文と名く。蓋し必ず文、而して後に選ぶ也。文に非らざるは則ち選ぶざる也。経也、子也、史也、みな専ら文と名かざるべからず也」と述べている（『書梁昭明太子文選序後』⁹¹⁾）。阮元の基準によれば、いわゆる「文」とは「務めて音を協えて以て韻を成す」ものである（『文言説』⁹²⁾）。劉師培の見解は阮元の説を踏襲したものである。三年間の牢獄を経て釈放後、東京にある革命の本部に迎えられたばかりの章炳麟は、劉師培の名こそ触れていないが、一九〇六年八月に『国粹学报』において「文学論略」を連載した。これは劉師培を論駁した文章であると見てもほぼ間違いない。

しかし、次のような事実も無視できない。まず、劉師培が文章を掲載する前の一九〇二年に、章炳麟は「文学説例」第十五号において「『文選』は口説（口語的文体）を選ばず、これは後の人が法るべきである」と述べている。⁹³⁾ この言葉は主には文にとつて口語的文体の欠点を強調する文脈にある。これは直接「文学」の定義・範囲をめぐる討論ではないが、それと関連している問題である。しかし、これは劉師培の論文よりだいぶ前に掲載された論文であるという事実を見れば、章太炎の論文は単に論争するためのものでないことが窺い知れよう。

次に、留意すべきなのは、これが章炳麟における目錄学的な視点からの中国学術史のとらえ直しに関わっている点である。この問題については紙幅により別の機会に単独の問題として扱いたいので、簡単に触れるに止めたい。

すなわち章炳麟の「文学」定義・範囲についての討論が、中国文学の最大の特徴の一つとさえ言える韻文の伝統を相対化したことは事実である。彼の拡張された「文学」概念は、彼の学術史、すなわち彼のいう意味での「文学」史の捉え直しという関心にとつて大きな意味を有していた。同時に、美（情）と倫理（政治）とが不可分な関係にあるべきであるという「文学」観にとつても、重要な意義を有していた。美と倫理または文と質とが不可分な均衡関係にあるという彼の「文学」観は、彼における「表象の病」

に対する批判にもつながっている。⁽⁶⁴⁾

章炳麟の『国故論衡』（一九一〇年）に収録された「文学総略」などの「中巻」の論文は、目錄学的見地から「文」と「史」との関係論を論じるものであり、清の儒者章学誠（一七三八—一八〇二）の『文史通義』（一八三二年刊行）などの著作と対話関係にある学術史的なものである。簡単に言えば、章炳麟は章学誠と同様に、隋以来始められ、清の史上最大の叢書編纂事業である『四庫全書』において頂点に達した図書の四部分類（経部、史部、子部、集部）に対して批判的な立場を取っていた。とりわけ章炳麟は四部のなかの「集部」の分類法に対して批判的であり、『七略』の分類法を主張した。『七略』とは前漢の劉向・劉歆父子が主張する七個の書目のことである。それぞれ「六部法」（六芸略、諸子略、詩賦略、兵書略、術数略、方技略）、及び総序にあたる「輯略」である。⁽⁶⁵⁾『漢書』「芸文志」はこの七略に基づいている。これが章炳麟の意味している「文」の根幹である。章炳麟は「文学」に関して「四部」分類法の書籍はことごとく「文」であり、一般的に理解されているような、「集部」のみが「文」であるという観点を取っていない。章炳麟にとって、経・子の「文」こそ、千古の高文であった。これも章炳麟の「文学」が戯曲を包括していない原因の一つであろう。なぜならそれは文字、そして『七略』によって決定されたものだからである。

次に、章炳麟の学術史的関心は同時に「文学復古」という関心とも関係していることである。「文学復古」の問題は彼における革命の問題と関わっている。そもそも章炳麟のいう「文学復古」とは翻訳語と関係がある。鄭師渠が指摘した通り、一八七九年に出版された沈毅和の『西史匯函続・欧洲史略』において the Renaissance を「古学復興」と翻訳した。⁽⁶⁶⁾ 羅志田も指摘したように、「文学復古」「文学復興」「古典復興」「古学復興」などは、みな今日の中国語の「文芸復興」の訳である。⁽⁶⁷⁾ 章炳麟の「宗教」の再構築、特に仏教の再構築は、革命の問題に直接関わっているが、これも彼における「文学復古」の一環でもあった。古典学術、文学を含む文化、政治に対する批判的再構築と復興が、章の狙いであった。これが筆者がいう章炳麟の「復古的“新文化運動”の含意である。⁽⁶⁸⁾

文学復古の思想は章炳麟の著作において一貫しているが、しかしこの考えが自覚的になったのは、彼が現実的に革命を選ぶ方向性が明らかになった一九〇〇年であると思われる。「文学復古」という言い方そのものが最初に現れたのは、一九〇六年以後であるようだ。これは彼が「東京留学生歓迎会演説辞」（一九〇六年七月一日）において、「惜しいことに小学が日に日に衰え、文章も見られたものではない。もし小学を提倡して文学復古に到達することができれば、その時の愛国保種力量は偉大なものとな

るにちがいない」と述べている。⁽⁶⁹⁾ また、同じ年の「革命道徳説」においても「かのイタリアの中興も文学復古が先導となつたのであり、漢学も同じはたらきをするのであらう。民族にとつても益こそあれ、損はないものだ」⁽⁷⁰⁾。この意味において、彼の「文学復古」もヨーロッパ思想史の影響の下にある。したがって「文学復古」思想がまだそこまで自覚されていない一九〇二年の『新民叢報』論文と一九〇四年の『楹書』重刻本の収録論文において、章炳麟はまだ小学を基としながら、字や詞のレベルにおいて「文学」を論じようとしていたが、文学復古の思想が自覚された一九〇六年の『国粹学報』時期になると、彼はすでに「文学」を学術史のカバーすることができるすべての文献を包括させ、それを革命の問題と結合させたのである。

九 韻文伝統の解体者としての章炳麟

——「五・四」白話文運動の 不意なる準備者の一人

白話文小説を中心とする翻訳概念としての「文学」と比較すれば、章炳麟の「文学」の範囲は遙かに広く大きい。章炳麟より狭い概念で「文学」を用いたのは、阮元、劉師培の論である、韻があるもののみを「文」とする文学観である。しかし、他方、章炳麟は竹や帛に書かれたすべての

文字を「文」とするので、不本意ながら、前近代中国の文学の特徴の一つである韻文の伝統を解体するのに一助があった。この意味において、不本意にも章の「文学」観は「五・四」新文化運動において確立された翻訳概念としての「文学」に通じるところがあり、章は彼らに一助があった、とも言える。これと対照的なのは、劉師培の「文学」観と「五・四」新文化運動時代の文学観とは真向から対立しているという点である。章炳麟の「文」は、学説、歴史、公牘、典章、雜文、小説などを含んでいるので、新文学運動の「文学」観における小説重視の理念とは矛盾していない（もちろん章の「小説」と「五・四」世代のそれは実際違うが）。また、王国維の「文学」概念は明治日本を経た西洋の「文学」概念の影響下にあるが、王国維のように章炳麟が戯曲を「文学」の範囲に入れていない点は欠陥であると言わざるを得ない。ただ章炳麟の基準で言えば、少なくとも劇本は「文学」である（彼は劇本について言及すらしないようである）。

新文学の旗手の一人である魯迅は、複数の場面において劉師培の『中国中古文学史』を激賞していることがよく知られている。⁽⁷¹⁾ しかし、韻文のみを「文」とする本書を新文学の旗手である魯迅が激賞していることは、興味深く不可解である。この魯迅こそ若い人たちに「中国の書籍」をできれば読まないでほしいと呼びかけているからである。⁽⁷²⁾

さらに興味深いのは、魯迅が漢末、魏、晋、宋、齊、梁、陳の文学を激賞しているのも多少章炳麟の影響がある。少なくとも一九〇六年から一九〇九年の期間において、魯迅の書いたものに章炳麟からの影響が濃厚に見られる。章炳麟は文が漢魏を追うことを主張するが、劉師培もこの点は同様である。そのためこの点では魯迅の劉師培に対する称揚は矛盾してはいないと言えよう。「五・四」新文化運動前後の魯迅の古典文化に対する伝統が如何に複雑なものであるかが窺い知れる。

章炳麟の「文学」をめぐる討論は、彼をして中国文学の強靱な韻文伝統に対する有力な解体者にさせただけでなく、彼をして中国の強靱な經学伝統に対する有力な解体者にさせたのである。なぜなら、彼の「文学」は同時に目錄学の視点における學術史でもあるので、清の儒者章学誠の「六經皆史」に通じる章炳麟の立場は、六つの経を「歴史的文獻」に下降させただけでなく、彼の定義にある「文学」にも下降させたからである。また、同時にそのような視点からは、孔子は六つの経の作者ではなく、編集者に格下げされた。かくして、章炳麟の理論は「五・四」新文化運動の若い世代のために、また近代的な歴史学の到来のためにも、近代的な「文学」の到来のためにも、そして「孔家店を打倒せよ」という「五・四」新文化運動の伝統否定のスローガンの高揚のためにも、全く不本意でありなが

ら、その準備となつてしまつたのである。⁽²⁵⁾章炳麟と「五・四」新文化世代との複雑な関係はここからも窺い知れるであらう。

〔付記〕本稿を書くにあつて異なる場において、鄭毓瑜氏（中国文学）、陸胤氏（中国文学）、張猛氏（漢語史）、王瑞來氏（漢語文獻学）、陳雪虎氏（中国文学）、森岡由紀子氏（中国文学）の諸氏から示唆され、ご教示をいただいた。文責は自分にあるが合わせて感謝したい。

注

- 〔1〕『籌議海防摺』『李鴻章全集』第二卷、海口・海南出版社、一九九七年、八二五頁。
- 〔2〕『左庵外集』卷六、『劉申叔先生遺書』下卷、江蘇古籍出版社、一九九七年、一四四〇—一四四二頁。
- 〔3〕朱維鈺「前言」『章太炎全集』第三卷、上海人民出版社、一九八四年、六一八頁。
- 〔4〕例えば、周助初「黃季剛先生『文心雕龍』的學術淵源」黃侃『文心雕龍札記』上海古籍出版社、二〇〇六年所収。周論文は黃侃の『札記』を劉師培と章炳麟との間の論争に返答する著書として見ている。王風も劉師培と章炳麟との間の複雑な對話関係、ないし論争関係を明らかにしようとした。王風『世運推移與文章興替——中国近代文学論

集』北京大学出版社、二〇一五年、六一―七八頁。

〈5〉この点については、林少陽「近代中国の誤読した『明治』と不在の『江戸』——漢字圏の二つの言文一致運動との関連」(国文学研究資料館編『もう一つの日本文学史』勉誠出版、二〇一六年、二二八―二二九頁)を参照されたい。

〈6〉以下の資料を参照した。「国語施策年表」日本文化庁『国語施策百年史』二〇〇六年、九二〇―九三七頁、服部隆「言文一致の歴史」飛田良文編『言文一致運動』明治書院、二〇〇四年。

〈7〉木下真弘『維新旧幕比較論』宮地正人校注、岩波書店、二〇一八年、二二―二四頁。

〈8〉『夏目漱石全集 14 文学論』「序」岩波書店、一九九五年、七一―八頁。

〈9〉林少陽「漱石と中国文学」フェリス女学院大学日本文学国際会議実行委員会編『生誕百五十年——世界文学としての夏目漱石』岩波書店、二〇一七年、七一―九二頁。厳密な意味ではこの論文の標題の「中国文学」は括弧を付けるべきであった。なぜならば、漱石が『木屑録』を書いた時期に近代的な意味での「中国文学」概念がまだなかったからである。

〈10〉夏目漱石「思ひ出す事など」『漱石全集』第十二巻、岩波書店、一九九四年。

〈11〉中村光夫「漱石・鷗外と漢文学」日本近代文学館編『現代文学と古典』一九七〇年、四八頁。

〈12〉明治日本の中国文学資料について和田秀信の整理があ

る(和田英信「明治期刊行の中国文学史」川合康三編『中国の文学史観』創文社、二〇〇二年所収)。日本文学史の關係については、下記の研究が挙げられる。戴燕『文学史的権力』北京大学出版社、二〇〇二年、三四―三六頁、齋藤希史『漢文脈の近代——清末の文学圈』名古屋大学出版会、二〇〇五年、第一章、などがある。ヨーロッパ思想と明治日本・近代中国の文学史叙述との關係、日本の国史と文学史叙述との關係については、Lin Shaoyang, "Making National History with Literary History: Hegel's Influence via Taine on Meiji Japan and the Late Qing and Early Republican China," *Frontier of Literary Studies in China*, 2015, 9 (2): 160-189。陳廣宏『中国文学史的成立』上海古籍出版社、二〇一六年、一―二二五頁、などが挙げられる。

〈13〉章氏学(章炳麟)「文学説例」『新民叢報』第五号、一九〇二年四月八日、七五頁。

〈14〉同右。

〈15〉陸胤「爾雅以觀於古」——東西知識網絡中的章炳麟「文学説例」『文匯報』二〇一八年一月五日。手稿は <http://wap.council.artron.net/bigpic.php?ArtCode=art0070880688&flag=2> で参照することが可能である(二〇一八年二月二日アクセス)。このアドレスも陸論文によるものである。

〈16〉『重刊宋本爾雅注疏』(嘉慶二十年)、『十三經註疏』論語、孝經、爾雅、孟子』中文出版社復刻本、一九七四年、五五七―六頁。翻訳は引用者による。

〈17〉訓読は栗原圭介訳注『大戴礼記』新釈漢文大系、明治

書院、一九九一年、四五四頁による。訓読を少し調整した。

〈18〉『姉崎正治著作集 6 宗教概論』国書刊行会、一九八二年、三二八、四五七―四五八頁。強調は原作者。ただし常用漢字に直した。

〈19〉章炳麟と姉崎正治、マクスミューラーとの関係について最初に研究したのは小林武である。小林『章炳麟と明治思潮——もう一つの近代』研文出版、二〇〇六年、七〇―八九頁。章炳麟における「表象主義」と「引申」との関係については、林少陽『「修辭」という思想——章炳麟と漢字圏の言語論的批評理論』（白澤社、二〇〇九年）一五九―一七〇頁。彭春凌「章炳麟対姉崎正治宗教思想的揚棄」『歴史研究』二〇一二年第四期）も参照されたい。

〈20〉前掲、章氏学（章炳麟）『文学説例』『新民叢報』第五号、七八頁。

〈21〉同右、七五頁。

〈22〉秦の李斯（？―前二一〇）『倉頡篇』、趙高（？―前二〇七）の『爰歴篇』、胡毋敬の『博学篇』は漢代になると合わせて『倉頡篇』と呼ぶ。班固『漢書』「芸文志」、『漢書』第六冊、北京：中華書局、二〇〇九年、一七二―一頁。翻訳は引用者による。

〈23〉同右。

〈24〉章氏学（章炳麟）『文学説例』『新民叢報』第九号、一九〇二年六月六日、六六頁。

〈25〉同右、六七頁。

〈26〉『重刊宋本毛詩注疏』（嘉慶二十年）、『十三經註疏／詩

經』中文出版社復刻本、一九七四年、五六八頁。翻訳は引用者による。

〈27〉同右。

〈28〉Stephen Owen, *Reading in Chinese Literary Thought*, Cambridge, Massachusetts and London: the Council on East Asian Studies, Harvard University Press, 1992, p. 49.

〈29〉前掲『重刊宋本毛詩注疏』五六六頁。

〈30〉馬瑞辰『毛詩伝箋通釈』上、北京：中華書局、二〇〇八年、一〇頁。

〈31〉前掲、陸胤「爾雅以觀於古」——東西知識網絡中的章炳麟「文学説例」。章の原文は次の通りである。

知爾雅之為近正、明民之以共財。奇恒今古、視若遊塵、取捨不同、惟其弔当。斯則華士諛聞、鄙夫翫習、其皆有所底止乎？

わかりづらいが、語彙的なレベルの解釈を付けると、次の通りである。「遊塵」：浮塵のことであるので下品であり卑しいことを喩える。「弔当」：至当。「爾雅」「釈詁」…弔、至也。「諛聞」…やや声望がある。諛とは発音も意味も「小」と同じである。「翫習」…弄ることを習慣としてしまう。「底止」：終極の意味。「底」は発音も意味も「致」と同じである。以上は徐復の注釈を参考した。徐復『廬書詳

注』上海古籍出版社、二〇〇〇年、四五二頁。

〈32〉前掲、徐復『廬書詳注』四五二頁。

〈33〉訓読は、竹内照夫注釈『礼記』中、新釈漢文大系、明治書院、一九九一年、六九八頁による。

- 〔34〕 阮元校勘『礼記』（清嘉慶二十年重刊宋本『十三經註疏』第四冊）中文出版社、一九七四年、三四四九頁。
- 〔35〕 前掲、徐復『墟書詳注』三八一頁。
- 〔36〕 阮元校勘『論語』（清嘉慶二十年重刊宋本『十三經註疏』第七冊）中文出版社、一九七四年、五四四三頁。
- 〔37〕 劉師培「論文雜記」鄧実・黄節主編『国粹学報』復刻本第四卷、揚州・広陵書社、二〇〇六年、八九一―八九二頁。同、八九二頁。
- 〔38〕 『左庵外集』卷六、『劉申叔先生遺書』下卷、一四四一―一四四二頁。
- 〔39〕 章氏学（章炳麟）「文学説例」『新民叢報』第十五号、光緒二十八年（明治三十五年）、一九〇二年九月二日、五一頁。
- 〔40〕 同右、五八頁。
- 〔41〕 『章太炎全集』第四卷、上海人民出版社、一九八五年、三八六頁。
- 〔42〕 同右、三三九頁。
- 〔43〕 『中国国資料叢書 六 中国初期社会主義文献集① 新世紀（影印）』大安、一九六六年、一四二頁。
- 〔44〕 錢玄同 [Esperanto] 『新青年』第四卷第二号（民国七年二月十五日）。
- 〔45〕 劉師培「論文雜記」『国粹学報』（復刻本第四冊）八九二頁。
- 〔46〕 以上各節の引用文は、劉師培『中国中古文学史／論文雜記』北京・人民文学出版社、一九九八年、五一―六頁による。
- 〔47〕 前掲、陸胤「爾雅以觀於古」——東西知識網絡中的章炳麟「文学説例」。
- 〔48〕 章太炎「與吳君遂」六（一九〇二年三月一八日）、『章太炎全集 書信集』上、上海人民出版社、二〇一八年、一五五頁を見よ。
- 〔49〕 『国粹学報』乙巳第一号、鄧実・黄節主編『国粹学報』復刻本第三卷、八頁。
- 〔50〕 平田昌司『文化制度和漢語史』北京大学出版社、二〇一六年、九頁。
- 〔51〕 「明治大正期における桐城派の文章論の影響——藤野海南、安野重繹、西村碩園などに関する考察」陶徳民『日本における近代中国学の始まり——漢学の革新と同時代文化交渉』関西大学出版部、二〇一七年、三一―三四頁。
- 〔52〕 『国粹学報』乙巳第一号、鄧実・黄節主編『国粹学報』復刻本第三卷、四頁。
- 〔53〕 章炳麟「文学論略」『国粹学報』丙午年第九号、『国粹学報』復刻本第六卷、二四四―一頁。
- 〔54〕 章炳麟「文学論略」『国粹学報』丙午年第十号、『国粹学報』復刻本第六卷、二四五―二四六―二四六一頁。
- 〔55〕 「文学総略」章太炎撰、龐俊・郭誠永疏証『国故論衡疏証』北京・中華書局、二〇〇八年、二五〇頁。
- 〔56〕 前掲、章氏学（章炳麟）「文学説例」『新民叢報』第九号、四九頁。
- 〔57〕 『王国維文集』第一卷、北京・中国文史出版社、一九

九七年、二四、二五、二九頁。

〈58〉 同右、三〇七頁。

〈59〉 文筆二分の論争については、前掲、周助初「論黄侃『文心雕龍劄記』の學術淵源」を参照されたい。

〈60〉 劉師培「文章源始」「國粹學報」復刻本第四卷、八八七頁。

〈61〉 阮元『寧經室集』下卷（三集卷二）鄭經元点校、北京：中華書局、二〇〇六年、六〇八頁。

〈62〉 同右、六〇五頁。

〈63〉 章氏学「文学説例」「新民論叢」第十五号、五一頁。

〈64〉 前掲、林少陽「修辭」という思想——章炳麟と漢字一圍の言語論的批評理論」第三章第三節及び第四節を参照されたい。

〈65〉 班固『漢書』「芸文志」第六冊、一七〇一頁。

〈66〉 鄭師渠『晚清國粹派文化思想研究』北京師範大學出版社、一九九七年、一二二頁。

〈67〉 羅志田『國家與學術——清末民初關於「國學」的思想論争』北京：三聯書店、二〇〇三年、九二頁。また、木山英雄「文学復古」と「文学革命」（『中国——社会と文化』第十二号、一九九七年、中国社会文化学会）も参照されたい。

〈68〉 林少陽『鼎革以文——清季革命與章炳麟「復古的」新文化運動』上海人民出版社、二〇一八年、七二—一〇〇頁。

〈69〉 「演説辭」、西順蔵・近藤邦康訳『章炳麟集——清末の民族革命思想』岩波文庫、二〇〇四年、九四頁。

〈70〉 「革命の道德」、同右、一二四頁。訳文にある「文芸復

興」を原文の「文学復興」に戻した。

〈71〉 前掲、林少陽『鼎革以文——清季革命與章炳麟「復古的」新文化運動』七二—一〇〇頁。

〈72〉 「魏晉風度及文章與葉及酒之關係」『魯迅全集』第三卷、北京：人民文學出版社、二〇〇五年、五二四頁。及び

「致台静農」（一九二八年二月二四日）『魯迅全集』第十二卷、一〇三—一〇四頁。

〈73〉 魯迅「青年必讀書」（一九二五年）『魯迅全集』第三卷、一二頁。

〈74〉 王汎森稱章太炎是將「經学歴史文献化」。『章太炎的思想——兼論其對儒学傳統的衝擊』上海人民出版社、二〇一八年、一七五—一八五頁。

〈75〉 李振聲が引用した『吳虞日記』一九一二年三月の部分において次の指摘がある。「五・四」新文化運動において「片手で孔家店を打倒しようとした老英雄」の吳虞が章炳麟の『諸子学略説』の影響が強いただけでなく、孔子を打倒しようとした主なりソースはほとんど章のこの本に依拠したものである。李振聲「作為新文学思想資源的章太炎」『書架上的歴史——李振聲文学批評選』安徽人民出版社、二〇〇五年、四四—四五頁。